

オリンピックメダリスト輩出に向けた体育会水泳部の指導環境改善に関する研究

トップスポーツマネジメントコース

5013A312-6 金田 和也

研究指導教員 平田 竹男 教授

1. 序論

2010年ロンドンオリンピックでは、競泳日本チームは戦後史上最多の11個のメダルを獲得した。

しかし11個のメダル、11人のメダリストが誕生したうち、大学生は3人いたが、大学をメインとして練習を行っているものは1人しかいなかった

水泳はサッカーや野球のようなプロスポーツに比べ、トップ選手の多くが高校卒業後、大学へ進学している。進学後の練習は、大多数の選手が大学で行っており、大学生の中からメダリストを増やしていく事、大学内でトレーニングを続けながら、メダリストを育成することが、今後の日本水泳界における課題の一つである。

しかしながら、大学在学中のトレーニング環境で重要な指導するコーチが抱える問題、大学水泳の指導環境について詳細な検討をした研究はない。

1.2. 目的

本研究の目的は、大学水泳の現状と課題を抽出し、オリンピックメダリストを輩出するために、大学水泳の指導環境に求められる要素を解明する。

2. 研究手法

日本の大学水泳の現状を把握するために、タイムの伸び率、ベスト率、コーチの指導時間等を調査した。さらに大学水泳部のコーチにコーチの雇用形態、強化体制、施設などのハード面について19の項目からなるインタビュー調査を実施した。また各大学における1時間あたりの選手1人への指導時間KKI (KanedaKazuyaIndex) を調査した。

オリンピックメダリスト輩出経験のあるコーチに「コーチ雇用形態」、「強化体制」、「施設などのハード面」について11項目からなるインタビューを行った

【研究1】各大学のベスト率と伸び率の研究

オリンピックメダリストが在籍しているA大学および日本学生選手権大会過去5大会における男子優勝校である法政大学・B大学・C大学の4校の大学入学前の自己ベストと大学入学後の自己ベストを比較して、その伸び率を大学全体、レベル毎(8位以内、16位以内、32位以内、100位以内、ランク外)、学年毎、学年によるレベル毎に分けて調査を行った。同様に自己ベストを更新しているかの有無を各項目において調査した。

【研究2】大学コーチへのインタビュー調査

研究1で対象とした各大学のコーチをインタビュー対象者とし、19つの項目による対象者と研究者1対1の半構造的インタビューを行った。回答から、コーチの考えや現状に関する部分(コード)を抽出し、その中でも重要だと考えていたキーワードを抽出した。

【研究3】KKI

KKI 算出方法

①1時間当たりの指導コーチ数の算出

$$1 \text{ 週間の総コーチ時間(h)} \div 1 \text{ 週間の総練習時間(h)} = 1 \text{ 時間当たりの指導コーチ数}$$

②コーチ指導時間の算出

$$1 \text{ 時間当たりの指導コーチ数} \div \text{選手数} = 1 \text{ 時間あたりの選手1人へのコーチ指導時間 (KKI)}$$

【研究4】メダリストコーチへのインタビュー調査

ロンドンオリンピック個人メダリストを輩出、または過去に金メダルと複数のメダリストを輩出した大学以外に所属するコーチを調査対象者とした。

7名のコーチに対し、11つの項目による対象者と研究者1対1の半構造的インタビューを行った。回答から、コーチの考えや現状に関する部分(コード)を抽出し、

その中で最も重要だと考えていたキーワードを抽出した。

3.結果

【研究1 結果】

法政大学とその他の3大学の比較より、法政大学は他大学に比べるとベスト率、伸び率の両者において他大学より劣る結果となった。

(%)		法政	A	B	C
ベスト率	4年	33.3%	66.7%	75.0%	83.3%
	3年	64.3%	88.9%	93.8%	62.5%
	2年	53.6%	56.4%	64.7%	45.0%
	1年	32.1%	55.3%	25.0%	45.0%
伸び率	4年	99.4%	101.8%	101.8%	103.0%
	3年	100.2%	102.3%	101.8%	101.1%
	2年	99.9%	100.4%	100.4%	100.7%
	1年	99.1%	99.6%	99.1%	99.4%

しかし、1年生のタイムの平均伸び率に関しては、どの大学も100%を下回っていた。

【研究2 結果】

大学コーチへのインタビュー調査より、法政大学と他の3大学の違いとして、①専属コーチがいないため一部の練習がコーチ不在のまま行われている②他大学に比べるとコーチ数、アシスタント数などスタッフの充実度が低い③チームの有力選手とコーチが海外遠征に行った際に、その他の残ったメンバーを指導するコーチの不在の3つがあった。

【研究3 結果】

KKI分析（1時間あたりの選手1人へのコーチの直接指導が可能な時間）を調査し、KKIが高い大学と日本選手権におけるメダル数には高い正の相関がみられた。
(R= 0.971, p<.05)

【研究4 結果】

オリンピックメダリストを輩出するために、コーチはトップの選手のみで構成された少人数のチームでの指導環境を求めていることがわかった。オリンピックメダリストを輩出した際の環境で共通していたのは、会社などによる制限がなく、フルタイムで選手の指導を行っていたことだった。また、ハード面として「50m プール

の重要性」を述べているコーチが多くみられた。

4.考察

1年生の伸び悩みという大学水泳界全体の問題の原因には大学進学時にコーチを変えざるを得ない、高校までのコーチにくらべコーチとの接触時間が減ることなどが指摘されている。推薦入試、スポーツ入試等でトップ選手を入学させることはよくみられるが、高校から有望な選手を勧誘する際に、高校時代に指導していたコーチも一緒にその選手の在籍期間限定で招待することが、解決方法の一つと考えられる。大学側にもメリットは有る。そのコーチが大学に所属し、該当選手以外の学生にも指導することにより、強化だけでなく、指導者増、他選手への指導機会の増加など多くのメリットが期待できる。

水泳のトップ選手のトレーニングにおいて、しばしば、50M プールの使用が議論される。近年では有力選手・コーチが JISS を使用して練習を行えるようになったことで問題は解決されつつあるが、大学でコーチが雇用されることで、大学にある 50M プールを使用しトレーニングができれば、この長年の課題も解決可能である。

選手それぞれが直接コーチからマンツーマンで指導を受けることができる時間が長いほど成績が良いことが分かった。この環境を作り出すには、先に述べたコーチの雇用だけでなく、チーム体制、チーム作りも重要になる。ダリストを大学水泳より輩出するために必要である「少人数での練習」を可能にしつつ、大学チームとして強化するためには、全日本学生選手権のチーム優勝に向けた全体の強化と、オリンピックメダリストを目指すチームなどに分けて、強化を行うことで大学体育会水泳部が抱える「コーチ不足」という課題を克服しながらも継続指導できる体制としての一案と考える。

5.結論

KKI が高い（1時間あたりの選手1人へのコーチの直接指導が可能な時間が多い）ほど、日本選手権におけるメダル獲得と強い相関関係にあり、KKI を高める方策をとることが大学体育会水泳部の指導環境の改善、大学生メダリストを輩出させる可能性を高めることが出来ることと結論づけた。